

## 宮城の地場産品復興支援「手のちから」プロジェクトーその2

プロジェクト代表者：菊 地 良 覺<sup>1)</sup>  
プロジェクト参加者：伊 藤 美由紀<sup>2)</sup>・大 沼 正 寛<sup>2)</sup>・小 嶋 三 男<sup>3)</sup>  
佐 藤 明<sup>4)</sup>・菅 原 玲<sup>5)</sup>・齊 藤 成 一<sup>6)</sup>  
プロジェクト連携先：中 島 敏 (ジーマ代表)  
みやぎ地場産品開発流通研究会  
秋保地域活性化協議会「手しごと AKIU」  
NPO 法人 地・LOHAS 推進会議  
宮城県産業技術総合センター (商品開発支援班)

### Project “The Power of the hands” of local products Miyagi reconstruction assistance – No.2

#### Abstract

Be configured with the relevant administrative and production center unions livelihood handicrafts of the prefecture, the support to Ogatu ink stone production and sales cooperatives severely damaged by the Great East Japan Earthquake this project, which celebrated its second year, “Miyagi local products I was supposed to be distribution study group “to address a central role.

In this paper, we have described in detail the practice support content specific support and create a framework aimed at the regeneration of new Ogatu support and content of last year on. In addition, received a boost of support of reconstruction assistance project grant of the University, I have detailed what was connected to the acquisition external funds for reconstruction playback of Ogatu ink stone production and sales cooperatives (Mitsui Environment Fund).

#### 1. はじめに

2年目の本プロジェクトは、初年度の復興支援の実践を踏まえて、甚大な被害を受けた雄勝硯生産販売協同組合への支援を全面的に行うこととした。これまで雄勝も参画してきた宮城県内の作り手と関係行政機関が組織する「みやぎ地場産品開発流通研究会」<sup>1)</sup>での合意を得たことが最大の特徴といえる。本稿では、2年目の復興支援の実践内容を詳述すると共に、本プロジェクトの実践を礎として復興支援を加速させるための外部資金「三井環境基金2012」獲得へと繋がった内容を詳述している。

---

1) 東北工業大学 ライフデザイン学部 安全安心生活デザイン学科 教授  
2) 東北工業大学 ライフデザイン学部 安全安心生活デザイン学科 准教授  
3) 東北工業大学 ライフデザイン学部 安全安心生活デザイン学科 助手  
4) 東北工業大学 新技術創造研究センター 事務長  
5) 東北工業大学 新技術創造研究センター 復興大学担当コーディネーター  
6) 東北工業大学 新技術創造研究センター 復興支援コーディネーター

## 2. 前年度から継続した実践内容とその課題

前年度から継続した実践内容は、① Webによる通販サイト、②企画展示即売、③被災地支援を目的としたイベント企画であり、以下にその成果内容を示した。各企画実践では、前年度の課題解決に繋がったものもあるが、新たな課題が浮上しているものもあり、動きの中で軌道修正しつつ課題解決の途を探らなければならないと、参画者一同は捉えている。

### 2-1) Webによる通販サイトの成果と課題

通販サイトの成果に関しては、表1に示した通り、初年度と比較してみると、アクセス数に関しては、大きな減少ではないものの、販売数、販売金額に関しては、初年度を大きく下回っている。このことは、使い手側からの誂え商品の要望は多々あるものの、作り手側の出店者数が限定していることや、震災後の経済の落ち込みと併せて市民の復興支援に対する希薄化が進んでいると推察している。本企画を充実させるには、作り手の参加者数を増やすことや、新商品の開発、Webコンテンツの更新等が不可欠な課題と捉えている。

表1 通販サイトの各年度の比較

	1年目 (H 23年7月～H 24年1月)	2年目 (H 24年4月～H 25年2月)
アクセス数 (人)	5,003	3,946
販売数 (点)	344	18
販売額 (円)	850,354	123,810
作り手の出展者数 (人)	21	20
出展数 (点)	147	104

### 2-2) 企画展示即売会

展示即売会は、昨年度に引き続き復興支援を目的として、売り上げの一部を義援金に充てることを条件に6回ほど実施した。本学一番町ロビーを会場とした展示会では、原則として販売が認められないことから、予約販売形式で対応しており、多くの来場者を得ることができた。「CCJクラフト見本市2013」は、主催者の(財)クラフトセンタージャパンに、雄勝硯生産販売協同組合への支援を要請して実現したものであり、食器としての商品への関心度が高く、多くのバイヤーからの商品引き合いがあったが、作り手の人的な生産体制が整わず、納入期限の条件付きでの注文販売を取らざるを得ない状況になっており、約2か月待ちでの納品となっている。「みやぎ手しごと展」は、秋保温泉地内にあるみやぎ地場産品開発流通研究会のメンバーでもある「木の家 秋保手しごと館」で実施し、1週間という短期間や観光客が少ないという時期とのこともあり、多くの売り上げには繋がらなかったことから、次年度は開催時期や期間の検討を余儀なくされた。また、本学の元教授であった秋岡芳夫が関与した熊本伝統工芸館における恒常的な展示即売の企画は、受け入れ側の現在の企画に組み入れる事が困難なことから今年度の実現には至らなかったが、積極的な受け入れに関しては大枠で了解を得ていることから、具体化に向けての内容の詰めを今年度は行っている。

手しごと秋保彩り展 Vol.3 「震災復興のための春の野の花とクラフト展」(一番町ロビー:2012年5月)



ディンプルアートで描く雄勝石1枚の絵コンテスト (一番町ロビー:2012年9月)



手しごと秋保彩り展 Vol.4 「温泉郷の歴史探訪」(一番町ロビー及び秋保里センター:2012年9月)





CCJ クラフト見本市 2013 (池袋・自由学園 明日館：2013年2月7日～9日)



みやぎの手しごと展 2013 ～雄勝硯の復興を願い～

(主催：みやぎ地場産品開発流通研究会, 木の家秋保手しごと館：2013年3月8日～14日)



### 2-3) 被災地支援を目的としたイベント企画

被災地支援のためのイベントとしては、前年度にも実施した「2012 大学祭」- SD 学科復興支援「市」は、今年度は八木山キャンパス会場ということもあり、多くの来場者があり、売り上げの一部を雄勝支援に充てることができた。また、「秋保第29回雪んこまつり」では、概ね4000人の家族連れが来訪し、被災地支援の義援金は名取川流域で繋がる被災地の荒井地区の小学校へ送ることになった。安全安心生活デザイン学科に協力要請のあった「秋保野尻新そば祭り」は、この地の歴史ある蕎麦に関心を持つ約300人の客を向かい入れることができた。今回の3つの企画には、前回と同様に本学の多くの学生が参画しており、生活弱者支援へのミッション教育の一環としては絶好の機会として位置付けられることから、今後も主体的なボランティア活動等の場としていきたい。

東北工業大学「2012 大学祭」でのSD 学科復興支援「市」(八木山キャンパス：2012年10月)





秋保野尻新そば祭り (秋保・野尻公民館：2012年11月)



「秋保第29回雪んこまつり～被災地の子どもに夢を～」 (秋保ビジターセンター：2013年2月)

**Yukinko FESTIVAL 2013**

被災地の子どもに夢を

開催日時  
**2月10日(日)**  
10:00～14:00

会場  
**秋保ビジターセンター 前広場**

仙台市太白区秋保町  
馬場字本小屋 16-1  
TEL: 022-399-2324  
(まつり当日)

主催：雪んこまつり実行委員会・仙台市

催し物  
そりすべり  
かんじき歩き  
雪んこまつりコンテスト  
雪んこまつり  
雪んこまつり  
雪んこまつり

**雪んこまつり 2013**  
秋保ビジターセンター・寺院MAP

① 二ツ森 野尻のぼろ山荘  
② 佐藤商店  
③ 大滝れすとら  
④ 秋保大滝不動尊  
⑤ 野口製菓場  
⑥ 秋保大滝不動尊  
⑦ ガラス工房  
⑧ 秋保大滝不動尊  
⑨ 秋保大滝不動尊  
⑩ 秋保大滝不動尊  
⑪ 秋保大滝不動尊



← イベントチラシ

会場看板 →

被災地の子どもに夢を

**雪んこまつり 2013**  
プログラム

2013年2月10日(日)  
10:00～14:00

協賛団体 MAP

協賛団体 MAP

**会場案内図**

まつり交流広場  
そりすべり  
かんじきコース  
雪んこまつり  
雪んこまつり

本部  
総合案内  
景観交換

エコテント  
屋台交流広場詳細

イベント当日パンフレット



### 3. 雄勝硯生産販売協同組合の再生を目指した外部資金獲得について

本学の復興支援プロジェクト助成支援の後押しを受け、雄勝硯生産販売協同組合の復興再生に向けた外部資金（三井環境基金）の獲得を、復興大学の協力も得て、積極的に行うこととした。その甲斐あってかH24年3月に助成の内示を得ることができた。以下にその申請内容の概要を詳述した。

#### 3-1) 活動の目的

東北工業大学は、東日本大震災で大きく被災した雄勝地区再生のため、この地域の産業の中核を担っている雄勝硯生産販売協同組合と共に、復興プランを作成し、実践活動を行うものである。本申請では、「雄勝石産業の復活を核とした生産とくらしの再生」のために、「場づくり（拠点構築）」、「モノづくり（商品・流通開発）」及び「人づくり（人材育成・交流）」を産学連携により実施し、少しでも多くの人々が町に戻ってこられるための環境づくりを目指すものである。

石巻市雄勝町は、東日本大震災により地区の中核であった雄勝石関連産業をはじめ水産・観光産業も壊滅的な被害を受け、現在においても都市基盤の復旧・復興像も見えないままにある。このため、住民の離散・流出に歯止めがかからず、コミュニティの崩壊が著しい。この問題を解決するには産業と雇用の立て直しが必須であり、とりわけ地区の雇用を下支えしてきた伝統産業である「雄勝硯、および石製品（スレート）産業」の一日も早い復活が求められている。このことは雄勝石産業が国内唯一とも言えるブランド価値があることから考えても欠かせない。（被災は大きかったが石材・鉱脈は枯渇しておらず、その加工製品から流通販売までの知恵・技も失われてはいない。）

しかし、現実には産業を支える関係者、職人も石巻市内外に離散して暮らしており、協働団体である雄勝硯生産販売協同組合（※1以下「組合」）でも、仮設建物内に事務所こそ設置をしたものの、実際の加工設備やものづくりの生産拠点は未整備のままであるため、震災前の市場対応にはほど遠い状況が続いている。

そこで東北工業大学では30年来継続している雄勝地区との産学連携事業（国指定の伝統工芸産業支援）を背景に、「雄勝石産業」の復活を核とした生産とくらしの再生」のため、「雄勝の技・雄勝の知恵・雄勝の風土を愛する心」を重要なコンセプトとし、様々な活動を実践して行きたいと考えている。特徴としては「活動拠点となる工房」の建設や、他産業（水産・食・地域資源）との連携を図る点があげられる。

我々はこの雄勝地区の状況を打破し、震災を乗り越えると同時に、硯・石産業の後継者育成問題とも向き合いながら、この地域の唯一無二の財産である雄勝石産業を核に復興を目指していきたい。長期的目標では「雄勝特有の自然資源（有形無形）を活かした魅力ある（まち）地域づくり」を掲げ、高齢者の技と知恵も活かされる「生涯現役社会」や自立型の地域の形成を図り、雄勝硯・石産業を核とする中で他産業との連携による“自然資源と産業と伝統の調和したくらし”という視点を持つ「持続可能な社会」の構築を目指して行きたい。

助成期間内においては、雄勝石を主体にした商品・流通の開発のための活動拠点として「雄勝 生産とくらしの工房※2」（移設可能な木質系プレハブユニット）を建設し、その場所を利用した、人材育成・交流事業の実践的活動を目標とし、具体的には調査活動やワークショップを実施する。本事業では大学と組合が中心となり域内の人々の「集いの場」として住民グループの活動を支え、ワークショップや勉強会を通じ「地域資源の再評価」をするなど、伝統を継承しつつも、あらたな再生戦略の構築等を目指す活動を行いたい。加えて他産業（水産・観光）等と連携し新商品・流通開発や食の提案を行い、域外との広域交流活動も展開して行きたい。また、工房 ※2 設置の利点として、ワークショップや勉強会活動を円滑に行える点や、子供から高齢者までが集うことで住民同士の絆をふかめる場所としての効果などが期待される。域内外の交流展開（展示会やシンポジウムの開催を含む）を行える点など、地域の発展には欠かせ

ない要素があると判断する。

- ※1 雄勝硯生産販売協同組合：雄勝硯，スレート瓦などの建築資材（現，東京駅舎の屋根にも使用），スレート皿等の工芸品等，全ての石製品のもととなる雄勝石（玄昌石）の採石生産販売のとりまとめを行っており，この地区の中核産業である。震災復興に当たっては，H24年6月に雄勝石に関わる復興ビジョン検討委員会（東北工業大学と産学連携事業としている）を設立し，産業再生や雇用促進の側面から，地区復興構想と，具体的アクションプログラムを検討している。当組合は，地域の牽引役として他産業（水産・観光）も絡めた，「新しいまちづくり＝雄勝の復興」を目指している。
- ※2 雄勝生産とくらしの工房：本施設は組合が自主建設する予定である。現在，雄勝地区には硯・石産業や住民の活動拠点となる場所が皆無である為建設を行うものである。移設可能とする理由は自治体の復興構想が未確定の上，設置場所も固定できない状況にあり将来に対し柔軟に対応するためである。なお，雄勝総合支所より，設置場所として旧雄勝総合支所至近が望ましいという要望をもらっている。

### 3-2) 活動の内容・手法

本事業は「①場（拠点）づくり」，「②ものづくり（開発）」，「③人づくり」を目的に掲げた実践活動であり，東北工業大学と組合との産学連携 ※1によりハード・ソフトの両面から実施する。具体的にはⅠ～Ⅴの項目から行うものとする。

助成期間中のスケジュール・具体的手法は表2に示すとおりである。

- I 【拠点施設建設助言】 “雄勝 生産とくらしの工房” ※2（構造・手法説明）  
（基本構想，設計・建設に東北工業大学から助言）
- II 【資源（有形・無形）調査活動】
- III 【域内，域外を対象にした ワークショップ事業 ※3】
- IV 【商品開発及び流通開発】
- V 【活動報告事業】

- ※1 本事業は東北工業大学（以下，大学）と雄勝硯生産販売協同組合（以下，組合）との産学連携事業により推進するものである。

大学は，1978年から秋岡芳夫（工業意匠学科時代の学科長）を中心とした共同研究チームによる東北・北海道を中心とし，地域ビジョン策定や地場産品開発支援事業等の実践的研究に取り組み，現在も後継教員が継続中。宮城県内の地場産品組合等との共同開発実も多岐に行ってきており，組合とは約30年前から商品開発支援を行い現在に至っている。

- ※2 拠点施設建設（組合による自主建設）では基本構想から設計建設にわたる総合マネジメントを東北工業大学が行う。目的に述べたように，雄勝石に関わる離散した関係者が再結集し，また地域内外の人々を集めて「産業とくらしの再生」を行うための拠点を設けるものである。復興事業が進んでいないことから，適切な用地を選び仮設的に上屋を設け，必要があれば移築ができるものとする。構造は木造プレハブ，組立式，移設可能とする。被災地地場産材を活用し，地元雇用にもつなげる予定。鉄骨プレハブを用いるのが早急で簡易であるが，「知恵と技，生産と手仕事」を構想する「場」の拠点は，地場産材を用いた木造が適しており，資材は石巻・登米地方から調達する。

- ※3 この実践活動は積み上げ型であるため，各年度同様のワークショップを開催するが，内容は次年度に移行するたび発展的に膨らみ，より多くの人，もの，環境を複合的に取り込んでいく。



表2 活動スケジュールと具体的手法

項目	場所	具体的手法	期間		
			H25	H26	H27
0	全体構想	雄勝	産学連携を主体に雄勝再生の構想		
I	拠点施設 建設助言	雄勝	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本構想から設計建設にいたる総合マネジメント…東北工業大学</li> <li>雄勝生産とくらしの工房 建設事業…組合にて自主建設</li> </ul>		
			開発設計	建設	
II	資源 (有形・無形) 調査活動	雄勝 地域 + 工房	<ul style="list-style-type: none"> <li>アドバイザーに大学教員が参画、各チームをつくり、活動</li> <li>有形(山資源、海資源、建築物、工芸品等)、無形(技・人・景観・歴史文化/民俗資料等)の調査検証</li> <li>雄勝石がもたらす文化的価値と、三陸の山海資源の検証、景観資源の活かし方を検証、観光資源への結び付けや、住民の啓蒙活動の基礎(雄勝を知る事)データとする</li> <li>次年度は調査データを統合し(産学連携)WSにつなげる</li> </ul>		
			調査活動	調査活動から得られたデータをもとに復興につながる具体的な活動を展開。ワークショップ実践活動から住民主体の継続活動への移行を目指す	
III -1	域内を対象 にした ワークショップ 事業	工房	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査データをベースに(もちより)活動を開始</li> <li>食改善グループ;地元の女性団体との連携(食材研究、魚食提案)</li> <li>教育;子供達と石を通じた交流、文化学習(石絵馬づくり)</li> <li>学生参画を通じた実践的教育(III-1、2共通)</li> <li>書を通じた交流(硯を実際に使う体験、書道、書画、他)</li> </ul>		
			WS準備期間	調査活動の統合 ワークショップ実践活動を実施 復興のための糸口を住民と一緒に検討	
III -2	域外を対象 にした ワークショップ 事業	工房	<ul style="list-style-type: none"> <li>主に域外の交流展開を行う</li> <li>他地域受け入れ型交流 石に触れる・知る</li> <li>教育;子供達と石を通じた交流、文化学習(石絵馬づくり)</li> <li>石の文化と技の体験学習・人材育成につながる活動</li> <li>工房を利用した食改善の提案、提供</li> <li>書を通じた交流(硯を実際に使う体験、書道、書画、他)</li> </ul>		
			WSの準備期間	WS活動の実施・展開 WSは年3~5回を想定、主に雄勝域外にもひろげて交流事業を展開 雄勝復興のための実践活動を実施	
IV	商品開発 流通開発 (組合主体の 事業展開)	工房	<ul style="list-style-type: none"> <li>スレート工芸品(皿や食器)他の開発、観光促進</li> <li>地域資源と地域間・国際交流に基づく雄勝石活用デザイン検討会</li> <li>WSを土台に、地域資源/文化を活かした観光産業の検討</li> <li>後継者育成関連事業の展開</li> <li>展示会、求評会、文房四宝展の開催</li> </ul>		
			準備期間	II、IIIの活動を関連づけて実践活動を展開 商品の開発 流通検証 実証 産業・文化・教育の面から復興を行う 自立型の復興を目指す 展示会・求評会※事業終了後も継続して行う	
V	活動報告 事業	雄勝 未定	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動報告/各年度中間報告を行う</li> <li>シンポジウム開催 域外交流 最終全体事業報告会</li> <li>※場所は未定(仙台、石巻市、東京を予定)</li> </ul>		
			中間報告	中間報告	最終報告会 シンポジウム

3-3) 活動による期待される効果

① 助成期間内に得られる成果

I 拠点づくりで得られる成果 (図1参照)

1. 石産業に関わる人々が集える場
2. 調査活動の分析や検証、アーカイブ展示ができる雄勝硯、石皿、クラフト製品等の展示  
雄勝地区文化の視覚的展示の場、触れて体験できる場
3. 学生参画による人材育成…地域づくりや復興支援に関わる人材
4. ワークショップ活動の拠点として利用できる
5. よりどころ、住民の交流の場、町外の人との交流の場ができる  
→食改善グループによる提案や実践活動
6. 人づくり・人材育成につながる(職人の養成、技と知恵の伝承、展示)

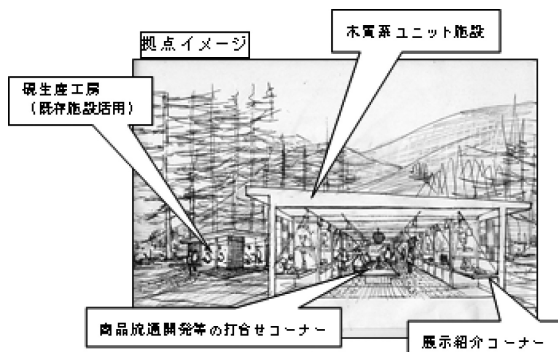


図1 拠点イメージスケッチ

II 資源調査事業で得られる成果

1. 調査活動: 有形・無形「地域資源の再評価・見える化」。再発見。調査データをベースにワークショップ活動に発展。新商品開発などにもつなげていける点。

データを統合し、人材育成や人材交流、域内・域外の交流を期待できる点。

2. 新商品の開発・産業活性化の糸口をつかむ ～観光産業等へのあらたな利用

### Ⅲ ワークショップ活動で得られる成果

1. 拠点を活用し、地域の活性化を図る＝人・組合員（職人）の気持ちの変化に結びつる＝「戻ることができる場所がある」という意識の変化
2. ワークショップで得られた各種成果を統合、新商品流通の開発、人材育成、交流等につなげていける期待（調査活動は助成後も必要に応じ、分野によってはワークショップと並行して永続的に行う）
3. 学生参画による人材育成…地域づくりや復興支援に関われる人材
4. “書”文化交流 青少年への文化育成として実際に硯を「使う・知る・広げる」体験事業。「書道大会」や「書道甲子園」、等、書道や書画を通じた書文化交流
5. 子供からお年寄りまでの生涯学習的意欲を高める
6. 子供達への教育…文化の継承、郷土を愛する心の育成、スレートを使用した石の絵馬づくり、屋根ふきや壁はりの体験、など「体験型学習（子供達への文化遺産教育）」の実施を行う
7. 地域交流→情報共有…（地域の女性＝お母さんたち、を中心に）食を主体にした暮らしの提案 住民グループ（雄勝生活研究所 魚食文化 販売研究 食品開発）との協働活動 域外との交流…展示会、シンポジウム開催
8. 文化・歴史（有形・無形資源）の再発見…新しい観光産業等への活用

### Ⅳ 研究・開発で得られる効果（将来目標）

1. 新商品開発・流通開発の実践（産学連携）
2. ブランド開発の糸口が持てる
3. 観光資源の開拓・開発

### Ⅴ 報告活動（対外的アピール活動）で得られる成果

1. 雄勝町外への情報の発信：参加型ワークショップの実施、報告会、シンポジウム開催
2. 他地域、異業種との交流促進：硯、石のクラフト（工芸品）またはスレート建築を主体とした地域間交流
3. シンポジウムやワークショップを通じ「持続可能な社会の構築」にむけての継続的議論の認識が高まることが期待できる

◎本事業では、最終的に持続可能な社会の構築に向けて、「雄勝を知ること（「雄勝の技・雄勝の知恵・雄勝の風土を愛する心」）は、人の未来と希望を語らうことにつながる」というコンセプトのもと、産業とくらしを見つめ直し再構築することによって、地域復興のあり方の一つとして、「現代人にとって必要な“充実”という生き方の提案」を模索するものである。この地区には自然と産業の融合により「高齢でも生き甲斐のある社会」を創る事ができる可能性がある。それは、技と知恵は年齢とともに成熟し価値を失わない点にある。石産業文化・漁撈文化・民俗伝承、がバランスよく存在し、限界集落的な場所でありながらも充実した社会構造は、現代社会を生きる私たちにとっての「これからの人間社会の生き方モデル」としても非常に価値の高いものであり、その解答のひとつとして期待が持てる。都市型、利便性追求型の社会ではないが、小さいながらも充実した社会構造づくりは、「生きる意味のある社会であり生き甲斐ある社会＝豊かな生き方」として、我々が将来を語る上で重要なポ

イントとなると考える。

## ② 活動成果の広がり（活動成果の継続、団体の成長）

活動成果を広げる方法として産学連携を主体に、拠点施設を建設（組合による自主建設）することで各種事業展開が可能となり、調査活動、ワークショップ開催、商品・流通開発、成果発表としてのシンポジウムや展示会、事業報告会の開催を行うこと。また結果として、以下に示す効果を期待している。

1. 調査活動により、（有形・無形の）資源が見えてくること
2. 協働活動にて調査をすることで、資源の意味を知り、ワークショップ事業に活かすこと
3. 各種ワークショップ事業の活動・展開により、域内の住民が「雄勝（魅力）の資源を再発見」することが可能となり、さらに域外、他地域との交流活動を通し、幅広いネットワークが構築できること
4. 「雄勝 生産とくらしの工房」を利用し、調査活動、ワークショップ事業の展開により、新商品開発や観光産業につなげる。また後継者育成を積極的に行い、地域産業を振興していくこと
5. 「書（道）文化」交流の拡大…青少年、若年層へ啓発  
硯を「使う・知る・広げる」活動 青少年に対する書道大会、書道甲子園など

## ③ 活動成果が広がった時の社会的インパクト

### （1）産業の再生による効果

1. 雇用促進、伝統技術の継承、新商品化開発により新たなブランドをつくること
2. 人材育成と人材交流により、人口流出をくいとめる
3. 立型社会の構築が図られること
  - ・食生活改善グループ等がとりくみ雄勝の食の提案
  - ・組合主体により生活者ニーズに対応した、石・スレートを主体にしたモノづくり
  - ・雄勝の魅力情報発信
4. 観・歴史・文化の見直し観光につなげる・書文化発展
5. 異種業・他産地交流 → 文房四宝展などや、海外異文化交流（日本の伝統文化輸出）を図る

### （2）教育・コミュニティ面の波及効果

1. 地域社会を愛する子供の育成…地域を考える・見つめる教育を、地場の自然資源や文化を通して行えること
2. 生涯現役社会…高齢者であっても技と知恵を活かす“くらし”ができる“まち”づくり
3. コミュニティの再生…知恵・風土を活かした世代間教育が可能である
4. 自然環境への意識啓発…山を守ることで海が守られる。雄勝の暮らしは、石（山）と海と人の輪である団体として発展・成長させていく予定・計画

本学は本事業を遂行することで、地域にとって「ひと・もの・こと・場～つながるものづくり～」を目指し、協働団体である雄勝硯生産販売協働組合が地域の産業の核たる役割を果たすべき発展・成長に貢献していきたい。今後も伝統技術を守り、創り、ものづくりを発展させるために、後継者育成につながる努力をしていくことや生活者ニーズにあった新商品開発を継続展開していくことを計画している。雄勝硯の復興は雄勝地域のコミュニティの再生につながると考えている。

本プロジェクトの活動の流れと体制については図2に示すとおりである。



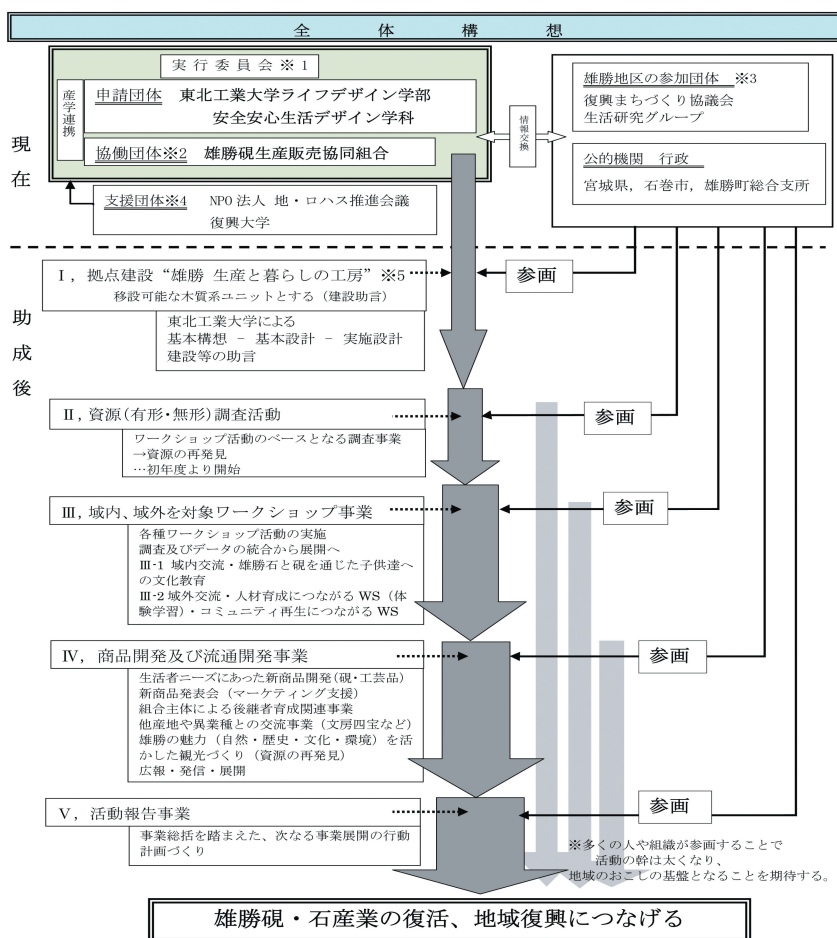


図2 活動の実施体制図

#### 4. まとめ

2年目の「手の力プロジェクト」の復興支援は、宮城県内の作り手の復興に対する熱き思い思いから、「協働」の精神で、本震災で甚大な被害を被った雄勝硯生産販売組合へと向かったことが最大の収穫と言える。また、その思いが復興支援への新たな外部資金獲得(三井環境基金助成)に繋がることになったと言っても過言ではない。

復興は、今始まったばかりである。何十年もの年月がかかると推察しているが、各地域の作り手と共に歩み続ける事こそが、本プロジェクトの共通のミッションとし、地域の持続的社会的再生構築を目指していきたいとプロジェクト関係者一同の思いでもある。

最後に、本プロジェクトに参画して頂いた多くの方々に対し、心から感謝申し上げたい。

#### 註

- 1) 「みやぎ地場産品開発流通研究会」は、地場産業の発展を目的に平成2年に発足し、地場産業のデザインや流通に関する情報交換や共同開発・企画販売展示会等を行ってきた。尚、佐藤明は前任地の宮城県産業技術総合センター所長として、菊地はアドバイザーとして本研究会の推進役を担ってきた。現在は、宮城県内の5つの工芸産地(岩出山竹細工・鳴子漆器・津山木工品・雄勝硯・手しごと秋保)や関係行政機関、そして本学科とNPO法人 地・LOHAS推進会議(事務局担当)で構成されている。